

『意欲的に取り組み、自ら追究する児童の育成』

～「話すこと・聞くこと」の指導の工夫・改善を通して～

I 研究の内容

1 研究の目標

伝え合う力を高めるための言語活動を工夫することによって、子どもたちが「話すこと・聞くこと」の力を身につけ、様々な場面で活用できるようにする。

2 研究の具体的内容と方法

- 「話すこと・聞くこと」の基礎基本についての理論研究
  - ・新学習指導要領を熟読し、徹底する。
  - ・昨年度の指導主事等の資料を再読し合う。
  - ・泉校長先生、石田教頭先生に指導助言をお願いする。
- 本校児童の「話すこと・聞くこと」についての実態把握
  - ・項目内容を見直した実態調査を実施し、一年間の変容を読み取る。(5月と2月)
  - ・抽出ペア(グループ)を決め、話し合い活動を分析する。(低・高で一例)
    - 話す側(事実・理由・根拠・強調・順序・応答・補足・話題提起など)
    - 聞く側(あいづち・感想・質問・確かめ・共感・比較・関連・反論など)
    - その他(声の高低・強弱・表情・視線・身体表現など)
- 「伝え合う力」を定着させる国語科授業の工夫・改善
  - ・指導を焦点化するために「1授業1目標1評価」をめざし、指導と評価の一体化を図る。
  - ・学習過程を明確にし、授業の目標を明らかにして、目標を共有化する。
  - ・「基礎的・基本的な知識」を活用するための手立てを工夫する。
  - ・学習の系統に応じて、学習形態を工夫する。
    - ペアトーク→グループトーク→クラストーク など
  - ・学習を振り返り、目標への到達を意識できるような評価を工夫する。
    - 学習の成果が実感できる自己評価
    - 互いに認め合う相互評価
    - 次への活動の意欲につながる学習カード など
  - ・評価規準Cとされる児童(特別に支援が必要な児童)への手立てを考える。
- 「外国語活動」「特別支援教育」の学習会と実践
- 子どもたちの言語環境整備(言語環境プログラム)

### 3 授業案の作成及び授業実践

- ・第6学年国語科「自分の考えを明確に伝えよう」授業者：志田市造教諭  
指導助言：義務教育課 小林 大 指導主事
- ・第3学年国語科「ころ柿作りについて2年生に紹介しよう」授業者：阿部かおり教諭  
指導助言：峡東教育事務所 小林 俊彦 指導主事
- ・特別支援学級「思っていること、ぴったりはだあれ」授業者：山口みどり教諭  
指導助言：新しい学校作り推進室 岡 輝彦 指導主事

## II 成果と課題

### 1 研究の概要について

○研究主題は本校児童の実態に即したねらいであった。今年度は「聞く・話す」を「書くこと」と有機的に関連づけて指導法を工夫し、集会や学校行事でのスピーチの様子を見ても向上が感じられた。

○年間計画は、理論研究と学習会、授業研究とバランスよく計画され、理論と実践の両輪がうまくかみあっていた。学習会の内容は具体的で、授業実践につながるものだった。

### 2 研究内容と方法について

○意識調査を2回行ったことで、学年や個々の課題を把握することができた。また、子どもの理由付けを分析することで、どのように取り組んでいくかの指標とすることができた。ただ、子どもの自己評価は、時期や学習単元に左右されることが考えられるので、客観的な学力や教師評価からの分析が必要であろう。抽出グループを記録して、分析したことは、時系列にそって子どもの思考を追うことができ、指導上の工夫を考える契機となった。

○「1授業1目標1評価」によって、的を絞った授業が展開された。

○学習形態（ペア・グループ・クラス）が児童の実態や指導段階に合わせて工夫されていた。ふだん発言が少ない児童にも発言の機会が保障されていた。

○喫緊の課題である「外国語活動」「特別支援教育」については、専門講師を招いて学習したり、最新の情報を知らせていただいたりすることで、共通の理解を図ることができた。

○「聞く・話す」の研究は3年目となり、国語科だけでなく算数や図工での授業実践を参観することができ、拡がりが見られたことは研究の成果と言えるだろう。

## III 成果物

- 1 「話すこと・聞くこと」実態調査
- 2 研究授業、提供授業の授業案

(研究主任 雨宮 由縁)